

《書 評》

田中宏『EU加盟と移行の経済学』

ミネルヴァ書房, 2005年, 273pp. + iii.

田 口 雅 弘

I

本書は、ハンガリーを中心とした移行経済諸国の諸問題を「EU加盟」と「移行」をキーワードとし実証的に分析するだけでなく、旧社会主義体制、移行経済、資本主義経済と世界経済の諸連関を総合的な視点で捉え、理論的に体系化しようとする意欲的な試みである。本書の構成は、著者が「はしがき」で述べているように、世界経済の構造的な分析から出発し、現存社会主義分析から体制転換論研究へと発展してきた著者の研究の変遷をそのままうつつだしている。本書の中で著者は、そうした研究者としての模索と蓄積を体系化する独自のパラダイムとしてコンフィギュレーション理論を提示し、実証分析を通じてこのオリジナルな視点の有効性を検証している。全体として、ハンガリー移行経済の実証分析もさることながら、独自の理論的フレームワーク構築に大きな労力を傾倒した興味深い研究書に仕上がっている。

II

本書は、大きく分けて、理論的考察に力点を置いた第1章から第3章および第11章、ハンガリーの問題に触れながらもEU加盟や国際金融などを中心に対外経済関係と国内改革との連関を論じた第4章から第8章、ハンガリーの移行経済を所有構造転換や労働市場の諸問題を実証的に分析する第9章、第10章から成っている。

第1章「比較経済体制論からコンフィギュレーション理論へ —研究方法のパラダイム・シフトによせて—」では、従来の比較経済体制分析に世界経済的視野を取り込む理論的試みがなされている。A・ピクルとJ・トゥルーの共同論文「地球的・超国家的と国民的な変化のメカニズム：ポスト共産主義体制転換の国際的接近法と比較接近法の橋渡し」、およびJ・R・ホリングスワース、K・H・ミュラー、E・J・ホリングスワースの共著『社会経済学の上級化』の成果を紹介・吸収しながら、独自のコンフィギュレーション理論を展開している。これは、国家、国際機関、企業、個人、家族、社会的諸団体などの諸組織の多層的因果関係を立体的諸配置（コンフィギュレーション）でモデル化したもので、対内的要因と対外的要因が、多段階、複雑系であるにもかかわらず、それがひとつの経済

社会をシステムの的に形成しているということを示そうとするものである。このフレームワークは、本書における様々な領域・レベルの分析の骨格となっており、最もオリジナリティが高い部分なので、あとで別個に取り上げて論評したい。

第2章「現存した国家社会主義の歴史的考察」では、まず1970年代の石油危機以降、新興工業諸国の台頭、マイクロエレクトロニクス（ME）化などで急速に変貌する国際環境（産業構造転換、生活スタイルの転換）のもと、社会主義諸国における国家を頂点とした中央集権体制が国際環境の変化に適応した自己改革を果たせ得なかった過程が簡潔に紹介されている。そして、体制移行の諸問題は、単に英米流市場経済を選択するのかヨーロッパ大陸流市場経済を選択するのかという問題ではなく、これらの諸国（およびこれらの諸国の主要政治勢力が）がME化と脱工業化型の市場経済を目指すのか、重工業化タイプの市場経済を目指すのか、小農・小経営タイプの市場経済を目指すのかによって、またこれらの諸国が世界市場にどのように受け入れられるかによって、それらの諸国の市場形態が規定されていくという点を強調している。

第3章「企業・経営からみた20世紀社会主義とは何か」は、経営学の視点から見た社会主義の諸問題を明らかにしている。まず、現存社会主義が反人民的、過度に中央集権的な統制主義に陥った原因を、法形式的所有ではなく「経済的実質的所有」、「管理的所有」の問題だとし、国家と国営企業の管理者、そしてその周辺に位置する利害関係者（stakeholders）との関係を分析している。そして、ハンガリーのケースの具体的分析に基づき、硬直的な国営企業組織の中で経営機能の多元化とその相互調整およびそれらと社会の共同的機能の分離・調整がうまく進まなかったことが、社会主義体制の崩壊を導いたと結論づけている。さらに、「体制転換の困難性は、国家にかわる『資本』をもつ主体が出現しないことだけに困難があるのではなく、国営企業の旧管理者、そしてその周辺に位置する利害関係諸主体（stakeholders）との関係を調整・決定できるノルム、基準、ルールを確定できないところに困難がある」（p.49）と主張している。

第4章「コメコンからEU加盟の期待へ」ではまず、コメコンの成立とその基本的メカニズムを概観し、コメコンが機能不全に陥った原因を分析・整理している。さらに、コメコン崩壊後の中東欧諸国がどのようにして新しい対外経済関係を構築していったかを、欧州協定、コペンハーゲン加盟3基準を中心に論じている。そして、EU側に中東欧も含んだ新たな欧州のグランドデザインがなかったこと、EU自体が制度・機構をオーバーホールする時期に来ていたにもかかわらず、その努力を怠り、責任の一端を中東欧諸国に転嫁していたことなどを、移行諸国を取り巻く環境の重要な特徴としてあげ、他方これらの諸国をEUが「お荷物」論（費用便益論）として扱うことの一面性を指摘している。

第5章「EU加盟実現 —EU加盟交渉の終結とそのユーロ導入への展望—」では、第4章の分析をふまえた上で、EU加盟の費用便益分析を多角的に行ない、中東欧諸国のEU加盟は、既存のEU側にとって大幅な利益になることを論証している。そして、加盟交渉の最終段階を概観した上で、貿易、投資、金融の実質的統合は進んでおり、その点でEU経済発展との有機的関係は構築されつつある現状を指摘している。他方、EU先進諸国の生命力（Vitality）が減退していることをあげ、中東欧諸国の生育能力（Viability）を高めて全ヨーロッパ規模で産業調整を行なう（大同盟）という視点の

重要性を主張する。最後に、ユーロ導入問題にふれ、EU側に中東欧諸国EMU加盟時期尚早論がある一方、中東欧諸国側には、ユーロ導入準備が実質的にEUとの収斂を促進し、ユーロ導入によって独自通貨を維持する負担とリスクから解放され、また構造的収斂を促進する役割を果たす外資導入を促進するので、早期にユーロに加盟したいという議論があることを紹介している。

第6章「国際金融と体制転換」では、体制移行が国際的にどのようにファイナンスされてきたかが「移行経済諸国の体制転換の対外ファイナンス総括表」などをもとに論じられている。そして、体制転換当初は公的資本フローから民間資本フローへ主軸がスムーズに移行していったこと、最近では直接投資向け資金が民営化後の投資先を見いだせず、民間資本の流入が小規模化していることなどが述べられている。また、「第2のマーシャルプラン」援助で提唱された大規模な国際資金の純移動は実現せず、移行諸国のとりわけ公的資金に対する幻想は幻滅へと変色していったと結論づけている。著者は、西欧諸国が大型支援で中東欧諸国が国際競争力をつけることに関心を持たなかった、ということの原因のひとつにあげている。さらに第3節では、ハンガリーが「国際金融機関管理によらない、債務削減・金利軽減なしの『ブレディ提案』の自主的な実現」(p.115)による対外累積債務削減戦略をとったことが、論争を交えて紹介されている。

第7章「対内・対外直接投資の特徴とその位置」および第8章「対内直接投資と体制転換への影響」では、(1)世界的な資本の国際移動や直接投資の中で中東欧諸国やロシアがどう位置づけられてきたのか、(2)体制転換プロセスにおいて直接投資がどのような役割を果たしてきたのか、(3)国民経済発展や国家主権との関係で外資がどのように評価できるか、を論じている。まず第7章では、グローバルな視点から直接投資の問題にふれ、大陸間の競争とEUと非EU諸国間の競争、EU加盟国間の競争、中東欧の域内競争という各レベルでこれを論じ、「直接投資の導入をめぐる競争という視点から見ると、中東欧は90年代の初頭、世界経済への門戸を開放することによって90年代中葉にはその魅力を開花させはじめていたが、後半にはその魅力を半減させてしまった」(p.132)、と結論づけている。特に、ハンガリーへの直接投資の後退が顕著であるが、これに関しては第8章で分析されている。第7章ではさらに、移行諸国の外部委託加工貿易(OPT)依存度が大きく、その主要相手国はドイツであるが、これは必ずしも従属関係を意味せず、むしろポジティブな協力関係にあることが述べられている。そして、中東欧地域にまだ明確な地域的生産構造は誕生していないとしながらも、OPT向け生産と国内的な企業の技術・経営蓄積がうまく結合すれば、新しい地域的生産構造の形が見えてくるとしている。

第8章では、ハンガリーの直接投資の特徴とタイプ、および移行期特有のシステムの特徴と直接投資との関連性が分析されている。ここでは、中東欧諸国の累積直接投資を比較すると、ハンガリーは必ずしも低くないこと、また外資導入の先頭を走ってきたハンガリーは、後に大規模民営化や新規直接投資の導入を図り始めたポーランドなどとは違い、追加的投資の比率が高く(つまり直接投資の第2段階に入っており)、単純に直接投資がハンガリーからチェコ、ポーランドに逃避したという構図で語れないことを論証している。さらに、外資の現状と役割を、市場経済主体の形成と競争の創出、国際収支バランス改善、国際競争力の育成、副次的マイナス面(独占・寡占の形成、地域的不均衡の拡大、外資系企業と民族系企業の格差問題)、等の側面から分析している。また、銀行業における外

資の問題にも触れ、総合的には肯定的な評価を下している。第4節「直接投資を通じたスピルオーバー効果とキャッチアップ」では、対中東欧FDIの効果の両義性を様々な論者の議論を紹介しながら考察している。そして最後に、自国の発展の主軸を多国籍企業の戦略に依存することの危険性、生産・消費・生活スタイルの西欧化と従来の民族的・文化的スタイルの併存による二重経済・社会構造の復活について短く論じている。

第9章「ハンガリーにおける民営化と所有構造の転換」は、中東欧の体制転換にとって中心課題である所有関係の変更について論じている。まず、1980年代にさかのぼって、コルナイの議論を振り返りながら、歴史的にハンガリーの民営化方式がどのように準備されてきたか紹介している。さらに、「民営化準備期」（1988～1990年春）、「民営化の本格開始と実施」（1990～1994年）、「『大民営化』の加速化と終焉開始の時期」（1995～1999年）の3つの時期に区分して、具体的なプロセスを分析している。そして、この民営化の結果については、スタークの「再結合所有論」を中心に分析している。これは、一旦解体された所有関係が企業相互持ち合い所有（クロスオーナーシップ）と旧親会社の引力圏内にある衛星企業群の再結合というプロセスで形成されたとするものである。しかしながら、この論文に対する諸批判を援用しながら、こうした構造は部分的、過渡期的問題であり、重要な成果は短期間に私有領域が拡大したことであるとしている。一方で、市場的方法で競争的に民営化を実施したことは、旧管理者の大企業支配を排除することにもつながったが、ハンガリーの所有構造が外資に支配される構造を生み出した点も指摘している。

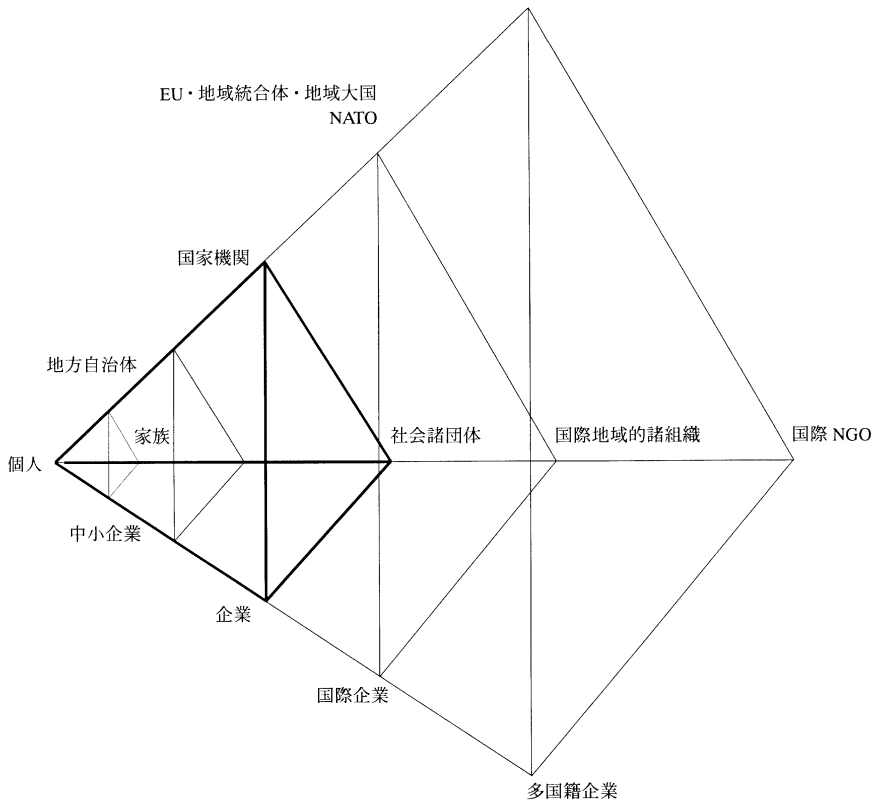
第10章「ハンガリー体制転換と労働市場、労働・生産過程」では、体制転換期を中心とした労働市場と労働・生産過程について、「組み替え抗争的交換理論」（ポウルズ・ギンタス）を移行期の実態に当てはめながら分析している。まず、体制転換以前の労働市場を概観し、つぎに体制転換期にある1990年代の労働市場の特徴を分析している。その中で、旧体制下での労働者の「日々の権力」（インフォーマルな偽りの従順、サボタージュ等）が減退し、体制転換で経営者の労働者に対する経済権力が確立されたこと、労働市場から弱者が退出させられたことによって労働市場の機能化が維持されていること、労働時間の弾力的利用が特徴的であることなどが論じられている。

第11章「市場経済移行の類型化のアプローチ」では、第1章で提示したコンフィギュレーション理論が理論・分析装置としてどの程度有効であるかを検証する前提として、移行の多様性、分岐を説明する「遺産」原因説、「移行過程」原因説などを広く検証している。その中で、(1)国家の過剰撤退による制度破壊と国家の制度構築機能を両極端とする軸、(2)地域統合への参加度合いとそこからの距離の線を表現する軸、(3)経路依存の軸をあげ、前者の2つの2次元軸の交差に対して経路依存の軸を3次元で交差させ、これを移行の類型化の枠組みとしている。

III

本書は、著者の長年にわたる幅広い分野の研究成果を総合的にまとめた力作である。したがって、各章をある程度完結した論説として読むことも出来る。しかしながら、著者が一番苦心して編み出した部分、本書の一番オリジナリティが高い部分は、本書全体を通じて展開されているコンフィギュ

図1 経済システムの立体的相互配置（コンフィギュレーション）図
 覇権国・国際機関・国連



(出所) 本書, p.12.

レーション理論というバックボーンだろう。

そこで本稿では特に、このコンフィギュレーション理論に焦点を当てて論評したい。

まず、コンフィギュレーション理論とはいかなるものであろうか。図1は、経済システムの立体的相互配置（コンフィギュレーション）を表した図である。現代の経済、政治、社会は複合的に関連しており、世界レベルでのメカニズム、超国家的なメカニズム、国内のメカニズムのそれぞれの局面が重層的に関連している。そこで、こうしたシステム全体を立体的・総体的に、または各層において分析するための概念装置が必要となる。著者は、国家機関－企業－社会諸団体－個人の4つの主体が直接結びつく三角錐型のシステム関係を一国内的な層（国民的な入れ子構造）として中核に据え、内部にはサブナショナル、ローカルなシステム（地方自治体－中小企業－家族－個人）を入れ子状に組み込み、外に向かっては超国家的なシステム（EU・地域統合体・地域大国・NATO－国際企業－国際地域の諸組織－個人）、グローバルなシステム（覇権国・国際機関・国連－多国籍企業－国際NGO－個人）を配置し、一国内的な層を包括するように組み立てている。つまり、この図は5層の入れ子構造になっている。また、三角錐に4つの平面は、それぞれ市場社会（△国家機関－企業－個人）、管理社会（△国家機関－社会諸団体－企業）、市民社会（△個人－社会諸団体－企業）、安全社

会(△国家機関－社会諸団体－個人)を表している。

ところで、そもそもなぜこのような概念装置が必要なのだろうか。著者の記述によれば、旧社会主義システム、体制転換、EU加盟を経て新しいシステムを形成する試みを、比較経済体制論と体制転換論という方法論を結合して体系的に描く手法を模索した結果たどり着いたパラダイムである。また、制度主義的接近による比較経済システム分析(比較経済体制論的アプローチ)と世界経済諸連関による分析(世界経済的アプローチ)を組み合わせることにより、国内的要因と国際的要因の総合的分析を可能にするために考案された。異なるシステム(体制)を共通の理論で分析すること、システムの移行も視野に入れた分析手法を確立すること、さらにグローバルな変化の中にそれを有機的に位置づけることは、現代ロシア・中東欧諸国研究にとって重要な課題である。これをすべて体系的に取り込んだのがコンフィギュレーション理論である。

それでは、著者のこうした試みは成功しているといえるだろうか。評者は、いまだ未完成ではあるものの、著者の壮大なパラダイム構築の意欲と着目点を高く評価したい。特に、国際環境の変化のメカニズムの中に旧社会主義体制や移行経済を位置づけた点は、著者のこれまでの世界経済研究の蓄積を充分に取り入れた興味深い成果である。まず第2章では、世界の産業構造の転換と社会主義諸国および体制移行諸国の関係を、国家的なレベルとグローバルなレベルのメカニズムの相互関係で論述している。また、第4章から第6章では、EU加盟と国際金融の役割について、各層間のメカニズムの対立と調和の視点から分析を試みている。FDIについても同様である。その意味では、様々な問題を多面的に分析する装置として本書の中では有効に活用されているといえるだろう。しかしながら、著者自身が第11章の最後部分で認めているように、地域・社会諸団体や個人、家族、文化や価値観といった側面での分析がなされておらず、せつかく個人－家族－社会諸団体－国際地域的諸組織－国際NGOという軸が重要な要素として設定されていながら、ほとんど活かされていなかった。したがって、市民社会の発展、安全社会の形成といった面の部分は言及されないまま残ってしまった。これらの部分は、今後の課題とするのは簡単であるが、本書で成功したと思われる総合的、多面的分析の中に、果たして残された部分を有機的に組み込んでいけるかどうかは極めて難しい課題と思われる。もっとも、この社会組織の軸自体は、今後ますます重要な要素となっていっくだろう。自由化、グローバル化が進み経済格差や社会の歪みに対する国家のサポートが弱まる中で、社会組織、中間組織の役割は急速に高まっている。世界レベルでは、国連をはじめとする既存の国際機関の役割に限界説がささやかれる中、NGOは国境を越えてますます活発に活動を展開するようになった。こうした流れを背景に、社会組織が既存のシステムの中で国際諸機関、国内諸機関と並ぶ重要な役割を果たすようになるのは間違いないだろう。したがって、著者のコンフィギュレーション理論は、これまでの歴史的過程を包括するだけでなく、未来も見据えたパラダイムを提示しているともいえるだろう。

IV

実証分析の面では、本書は「ハンガリー体制転換研究」のタイトルこそついていないものの、ハンガリーの体制転換過程を総合的に分析した貴重な研究書となっている。わが国におけるハンガリー体

制転換研究は、翻訳も含めて数多くあり、水準の高い研究蓄積がある分野である。しかし私の知る限りでは、ここ10年間でハンガリー経済研究書として出版されたのは、おそらく森彰夫氏の『ハンガリーにおける民営化の政治経済学』（彩流社、1999年）のみであろう。しかしながら、森氏の著作は民営化を中心に分析した研究で、ハンガリーの体制転換過程を総合的に取り扱っているわけではない。したがって、本書はハンガリー体制転換・移行期研究としても価値のある研究書といえる。とりわけ、先にも述べたように、国際経済との連関を明示的に取り入れて分析した点は、まさに著者の真骨頂であり、本書のユニークな点である。

さらに、世界の第一線の研究を丹念に分析し、批判的に取り入れている点も本書の大きな特徴であろう。あえて注文をつければ、こうした多くの議論の中に著者の主張が埋もれてしまい、著者自身の分析や結論が何か所かで見えにくくなっている点であろう。もう少し大胆に著者の見解を展開してもらいたかった。ただし、移行が対外的にどのようにファイナンスされたかという問題の分析、直接投資が果たした役割の分析、新しく形成された所有構造の分析、労働市場の分析などは、論点を明確して問題の構造をシャープにえぐり出しており、示唆に富んだ内容となっている。

全体として、本書は理論部分でも実証部分でも示唆に富んだ議論が展開されている質の高い研究書に仕上がっていると見える。また、幅広いテーマを取り扱いながら、それをコンフィギュレーション理論で有機的につなぐことによって、様々な分野・レベルでの議論や分析を一貫した視点で展開することにも成功しているといえるだろう。